

25 Cisplatinの尿細管障害に対するFosfomycinの効果

石川県立中央病院内科

伊藤英章，渡辺 彰，佐藤 隆，大家他喜雄

第27回本学会総会においてFosfomycin(FOM)がCisplatin(cDDp)の腎毒性を軽減させることを報告した。今回cDDpの尿細管障害に対するFOMの効果を検討した。
【対象】初回治療小細胞癌(ED)男性6例，平均年齢63才。
【方法】cDDp 80 mg/m²，cyclophosphamide 700 mg/m²，vincristine 1.4 mg/m²を2クール行い，2名で1クール目に，4名では2クール目に3日前よりFOM 2 g 1日2回7日間静注を併用した。腎機能検査は14日間，電解質と尿中NAGを測定した。【結果】

	FOM	前回	当日	1	3	7	14日後
Ccr (ml/min)	(-)	81	94	79	71	90	58
	(+)	102	117	91	100	105	82
Cur/Ccr (%)	(-)	7.9	10.8	10.5	10.6	11.1	10.6
	(+)	9.7	11.7	10.6	7.5	5.4	6.1
TRP %	(-)	89.8	84.3	74.4*	86.2	89.8	89.2
	(+)	91.6	89.7	85.0*	88.9	94.3	92.5
NAG (U/g・Cr)	(-)	5.6	10.8**	19.3*	13.9*	8.1	7.4
	(+)	5.9	8.0	9.7*	7.7	3.9	4.8

(各群 前日との比較 *P<0.05, **P<0.01)

【結論】尿中尿酸，リン，NAG排泄増加からcDDpによる腎毒性は尿細管障害が主であると考えられた。FOM併用により，尿中尿酸，リン，NAG排泄増加の軽減が認められた。今回の成績はFOMがcDDpの尿細管障害を軽減させることを示唆している。

27 Cisplatinに対するMetoclopramideとLorazepamの大量併用制吐療法

東京通信病院 呼吸器科¹，第2外科²

○伊藤敏雄¹，内藤 悟¹，伊部葉子¹，藤枝一雄¹，大久保修一¹，森成 元¹，岡崎俊典²，益田貞彦²

目的：cisplatin投与時の制吐療法としてMetoclopramide(Met)大量投与が良く知られている。

我々はMetにLorazepam(Lor)大量投与を併用し，cisplatin投与時の制吐効果を検討した。

対象：非切除肺癌15例，延べ26回。

方法：Cisplatin 80~100 mg/m²を含む併用化学療法施行時，day 1にcisplatin投与前後2時間ごとMet 1.5 mg/Kgを2回づつ計4回静注，day 2~5にMet 1.5 mg/Kgを静注した。同時にLor 3~4.5 mgを3分割でday 1~3に経口投与した。調査表により悪心の程度・持続期間，嘔吐の程度・回数，食思，眠気，副作用につき検討した。
結果：1)悪心：92%が軽度で，持続期間は1日19%，2~4日62%，5~7日19%であった。2)嘔吐：なしが15%，軽度が81%。頻度はday 1が36%，day 2が27%，day 3~4が各々35%，day 5が15%，day 6以降が8%であった。Lor服用時のみ嘔吐した例が23%，逆に服用中止後のみ嘔吐した例が36%であった。回数は全経過を通じて77%が3回以下であり，最高でも6回であった。3)眠気は3例のみ強度で，他は歩行可能であった。4)副作用は下痢が19%にみられた。

結論：Met+Lor大量投与により，制吐効果が増強されたと考えられる。しかし悪心・食思不振はcisplatin投与後4~7日間続き，day 4以降のLor少量継続投与の有用性が示唆された。

26 Cisplatin投与症例に対するMetoclopramide, Betamethazone併用による制吐効果

国立病院九州がんセンター呼吸器部

○田中希代子，馬場郁子，山崎世紀，大津康裕，三宅 純，竹尾貞徳，本広 昭，原 信之，大田満夫

Dopamine antagonistであるMetoclopramide(MCP)は，現在の制吐剤の主流となっているが，そのMCPと異なる薬理作用をもつBetamethazoneの併用薬剤としての意義を，randomized cross over studyにて検討した。1986年6月以降，CDDP(80~100 mg/m²)を含む多剤併用化学療法を施行した肺癌患者40例を対象として，封筒法によりMCP(2 mg/kg×4：CDDP投与30分前から2時間毎iv)先行群と，MCP+Betamethazone(20 mg×2：CDDP投与直前直後iv)先行群とにrandomizedした。規定に従い第2クールまで治療された28症例についての制吐効果は，CDDP投与当日の完全な嘔吐抑制が，MCP単剤で28例中11例(39.3%)，steroid併用で28例中17例(60.9%)にみられた。又，CDDP投与当日の嘔吐回数及び投与後の嘔気・食欲不振の持続日数が，steroid併用により有意に減少した。

この治療経過中に認めた副作用としては，下痢8例，吃逆2例，顔面筋の攣縮1例があったが，いずれも軽度であり管理可能であった。

今回の検討でも，まだ完全な制吐効果にはいたっておらず，さらに今後検討を重ね，患者に与える苦痛を軽減させ，治療効果を高める方法の確立が必要であると考えている。

28 肺癌化学療法(CAV療法、VAM-NCV交替療法)時の副作用とその対策

浜松医科大学第2内科

○秋山仁一郎，安田和雅，岩田政敏，源馬均，岡野昌彦，谷口正実，千田金吾，本田和徳，佐藤篤彦

目的：肺癌の化学療法は広く実施されており，薬剤の選択と効果については一定の評価が得られつつある。我々は当院における化学療法時の副作用およびその対策について検討した。

対象：肺非小細胞癌15例にCDDP+ADM+VDS(CAV療法)を，肺小細胞癌7例にVP-16+ADM+MTXとACNU+CPA+VCRの交替療法を施行した。

成績：(1)CAV療法では，一過性のCcrの低下(69 L/日以下)を4例に認めたが，全例投与前に復した。2000/mm³以下の白血球減少は10例に認められ，nadirは平均13.8日であった。10万/mm³以下の血小板減少は4例に認められ，nadirは10.3日であった。食欲不振，悪心，嘔吐は13例に認められた。(2)交替療法では，2000/mm³以下の白血球減少は5例に，10万/mm³以下の血小板減少は5例に認められた。(3)CAV療法の消化器症状にはステロイド・メトクロプラミドの投与が有効であった。(4)血液毒性に対しては，nadirがほぼ一定しているため，データのグラフ化を行なう事により迅速な対応が可能であった。感染症対策には白血球数よりポピドノヨードの含嗽，ST合剤の予防的投与が有効であった。

結論：副作用の出現様式の検討より早期に対策を講じた結果，安全に化学療法を施行する事が可能であった。